さよならを知らなかった

カオリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さよならを知らなかった

【Ｎコード】
Ｎ８６０８Ｃ

【作者名】
カオリ

【あらすじ】
記憶を失った男と不思議な子供の同居生活。優しくて切ない時間の中で、忘れられた真実は何処へ？（最後まで読まないとわからないタイプの話になっています）全１５話＋補足、完結済み。

1（前書き）

前半コミカル、後半シリアス。最後までお付き合いいただければ幸いです。連日更新が目標。

1

彼が目を覚ました時、世界は酷く歪んでいた。
透明な膜に包まれた景色が光と混じり合ってぐんにゃり融解している。はて、ここは一体何処だったか。訝しんで瞳を二、三度瞬けば、次第に視界は鮮明になっていった。同時に何かが頬をつ、と伝う感覚。手で触れたそこはしっとりと濡れていたので、涙を流したらしいとぼんやり思う。
けして悲しくて泣いたわけではない、生理的な現象だ。寝起きはどうも眼球が潤む。
（……寝起き？）
そこまで考えて漸く彼は違和感に気が付いた。自分がいつ寝たのか、とんと記憶に無い。寝る前まで何をしていたのかも覚えていなかったし、何処で寝たのかもわからないのだ。
「……何処だここ」
声に出してみて急激に思考がクリアになってゆく。まずい、かなりまずい。心の中で反芻させれば背筋が冷えた。

どうやらまた悪い酒の呑み方をしたらしい。
嫌なことがあるとすぐ酒に頼る、それは彼の悪い癖だった。前後不覚になるまで飲んだくれた挙句、記憶を意識もろとも飛ばしてしまったことなど数えきれないほどある。酔った勢いでふらふらと出歩いて路上で行き倒れ、目が覚めたときには警察のお世話に、なんてことも数度経験していた。どうやら今回は後者らしい。
（やっちまった）
あーあーあー、どうすっかな。頭を掻き毟りながら見上げた天井は見慣れないものだった。溜め息を吐きながら寝ていたベッドからもそもそと体を起こす。男一人の体を横たえるには十分な広さのある、真っ白なシーツに包まれたそれは簡易ベッドとしてはやけに上等だ。

お巡りさんにまた頭下げねェと。ぶつぶつ呟きながら初めて自分のいる空間を見渡した彼は、次の瞬間きょとんと目を見開いた。
「へ？」
零れた声は間抜け極まりないものであったが、彼にそれを気にしている余裕はなかった。交番の休憩室か何かだと思い込んでいたその場所は、何とも小綺麗な個室だったのである。誰かの家、のような。勉強机と本棚と、クローゼットが一つずつ。それから彼の座っているベッドが一つ。白い壁に白い天井、小さな窓と清潔そうな水色のカーテン、それと焦げ茶色のドアだけが景色の全てだった。　どう見ても警察署や交番では、ない。彼はそこの内部なら（不本意ながら）何度か見たことがあったし、そうでなくともここが違うことは一目瞭然だろう。
なにここ。男はぼやける頭を奮い立たせながら考え込む。
「誰の部屋だよ……」
「あ、起きてる」
わけがわからず頭を抱えそうになった瞬間、聞こえた声に心臓が跳ね上がった。
何処から現れたのか（と言ってもドアからなのだろうが）、何時の間にか部屋の中に見知らぬ子供が立っていた。飲み友達の誰かの家かも知れないと思い始めていた彼の予想を綺麗に裏切った、その子供がこの部屋の主なのだろうか。
「気分はどう」
少年なのか少女なのかもわからない、問い掛けた声は淡々としていた。茫然としているしかない男のことをじっと見つめたその子供は中性的な顔立ちをしていて、髪の長さも耳の下までと、性別を判断するには曖昧だ。小さな鼻と唇、目ばかりが硝子玉のように大きい。
「えっと……」
「……」
「警察、なわけねェ……デスヨネ」
動揺の余り言葉が崩れる。目が覚めたら知らない場所にいて、知ら

ない人間と対面しているのだから無理もなかった。これは一体どういう状況なのかさっぱりわからない。
何から尋ねれば良いのやら、唸って悩む男を子供は暫らくしげしげと観察していた。やがて満足したのか、丸い瞳をすっと細めてみせる。
「……おじさん、」
「オニーサン」
二十代でオジサン呼ばわりされれば流石に傷付く。（こんなことしている場合じゃないのはわかっていたが）咄嗟に訂正を入れた彼を、子供は面白そうに見つめ返した。
「おにーさん。アンタ、誰？」
「俺？」
先ずは自己紹介からということだろうか。男はほんの少しの間思考して、まあ良いか、と決断を出す。見ず知らずの他人に名乗るのは抵抗があったが、相手は子供だ。おまけにどうやらその子供に助けられたらしい、ということに彼は薄々気付き始めていた。
早いとこ話を済ませてここが何処か聞いて、家に帰って風呂に入ろう。そう思って口を開いた彼の表情が、次の瞬間そのまま硬直する。
「俺、は」
……、
……。
……あれ？　俺、誰だっけ。
＊
＊
＊
「……え、」

えぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇェェ！？
たっぷり三十秒の沈黙の後、近所中に聞こえるのではないかというくらい大きな声が轟いた。叫んだのは子供ではなく男の方である。
笑い事ではなかった。考えれば考えるほど思い出せない。彼は自身の名前も住所も電話番号も、仕事をしているのかいないのかも、家族の有無さえわからなくなっていたのだ。
「えェェ？　マジで？　俺……嘘ォォォォ！？」
「うっさいなァ」
何処からか椅子を引っ張りだしてきてベッドサイドに座った子供は、脚を組み頬杖をつきながら男を眺めていた。　冷静な表情に色は見えない。男の由々しき事態にも我関せずといった様子だ。
「だってお前、これアレだろ！？」
「記憶喪失」
「ンなベタな展開あってたまるかァァ！！」
もう一度声を張り上げた男に、あーはいはいそうですか、と面倒臭そうに相槌を打った子供は僅かに首を傾げた。色素の薄く細い髪がさらりと揺れる。
「まー良いじゃん。よくある事だし」
「無ェよ」
「言葉を覚えてるだけマシでしょ」
言われて男はゾッとした。彼の今覚えてることといえば、何故かはわからないが自分の年齢と性別（見ればわかるが）ぐらいのものである。これで喋れなければ絶望的だ。そこまでいくと記憶喪失ではなく退化だが。
「僕は、トキ」
そう呼ばれてた、と子供は言った。僕、と言うからには男なのだろうか。それにしてはやけに線が細い気もする。
自分がこの子供――トキ、と同じぐらいの頃はどうだったかを思い出そうとして、男は早々に諦めた。すっぱり記憶が抜け落ちている

のだ、わかるはずがない。
「アンタは」
「……何だ」
「自分のことがわからない。家にも帰れない」
「そーだけど……」
事実を淡々と突き付ける、トキはどこか楽しげだ。反対に男の顔は色を失ってゆく。
そうだ、これからどうすれば良い？
「仕方ないから、しばらくここに置いてあげるけど」
「え、」
まじですか。
男にとっては願ってもない話だった。こんな子供の世話になるわけにもいかないだろうが（今は一人のようだがきっと親だっている。いなければおかしい）最低限、今後の見通しが立つまでの居場所があるのは安心材料になる。今直ぐ身一つで放り出されるよりずっと良い。
礼を言おうと笑みを浮かべた彼はしかし、トキの次の言葉に凍り付いた。
「アンタの名前はこれからポチね」
「ポチィィ！？」
だって名前覚えてないんでしょう。言われたことはその通りなのだがあんまりだ。
ポチって。ポチって。ぶつぶつ繰り返す男の事は綺麗に無視してトキは続ける。
「僕ちょうど、ペットが欲しかったんだよねー」
能面のような無表情から一変、初めて子供が見せた笑顔は“にこり”ではなく“ニヤリ”だった。黙っていれば整った顔をしているのに、と男は思う。思っても言わない。それほどまでに、子供の笑顔は凶悪だった。

名前も家もわからない彼にとって、トキは唯一の頼みの綱だ。漸く冷静になってきた頭で考えてみたが答えは一つだった。

拒否権は、ない。

この瞬間、男はポチになったのである。

2

「良い？　ポチ」
「……」
ポチ、という呼び名を与えられてしまった男は恨めしげな視線を相手に送る。彼の目の前に座っているのはその命名主なのだか、余程そのネーミングがお気に召したのかひどく上機嫌だった。
（状況を整理しよう）
男は鈍く痛む頭を押さえながら考えた。やはり二日酔いなのだろうか。
この子供はトキというらしい（本名かどうかはわからない）。目の大きな、けれど中性的な顔立ちで色白。黒よりは茶色に近いショートヘアーで、真っ黒なパーカーを着ていた。
いまいち性別のはっきりしないこの子供に自分は拾われたらしい。おまけに自分は記憶喪失らしい――というのが、現在彼に与えられている情報の全てである。
トキは最初に、自分が男を見つけて『拾って』来た時の様子を端的に語り聞かせた。彼の予想通り、外で倒れているところを見つけて連れ帰ったらしい。トキ一人で男を運んだのならさぞ大変だっただろう。協力者がいたのかとも思ったが、彼にそれを訪ねる時間は与えられなかった。
良いかいポチ。上の目線から言い聞かせるように、ゆっくりと子供は言葉を紡ぐ。
「この家では僕が法律だから。今から言う約束、よく聞いて」
破ったらぱんつ一丁で外に放り出すから。
さらりと恐ろしいことを相手が言うので男は身体を強ばらせた。何だ、一体何を言い出す気だ。
「ひとつ、僕の言うことは絶対。ふたつ、僕の許可なく家のなかの物に触らない。みっつ、」

言いながらトキの瞳が男を捕えた。吸い込まれそうな黒。縁取った睫毛が意外と長いことに気が付いて感心する。まるで人形のようなその顔立ちに、うまく出来たものだ、と彼は思った。口さえ開かなければ完璧に違いない。

「僕に黙って、一人でこの家を出ないこと」

「……？」

思わず首を傾げる。何故トキがそんなことを言うのか、男にはさっぱり理解できなかった。勿論世話になるのだから、最後に出ていくときは挨拶ぐらいきちんとするつもりでいる。しかしトキの言うのはそれだけではなく、散歩程度の一人歩きもアウト、ということらしい。

「外に出たいときは、必ず僕も一緒に行く」

「え、俺そんな心配されるような状態？」

「そうじゃない」

とにかく駄目なんだ、そう言うとトキは席を立った。この話はここまで、と言うことか。そのまま部屋から出ていこうとするのを、男は寸でのところで引き止めた。

「おい」

「なに、ポチ」

「……。お前、親は」

トキは男の呼び名を変える気はないらしい。慣れるしかない、心中で溜め息を吐きつつ彼は問う。

「いないよ、この家には」

「え、一人暮らし？」

「まァそんなとこ」

ふぅん、と頷いて見せながら男は考える。トキの年齢はどう見ても十三、四かそこらで、一人暮らしができるようには見えなかった。本人がそう言うならば事情があるのだろう、深くは聞くまいと彼は思う。

（正直、ありがたい）

他人の家に転がり込む事への抵抗も、相手がトキ一人ならどうにかなりそうだった。子供という点では問題大有りなのだが、何よりも問題なのは自分自身であることを男は自覚している。これからどうするか、少なくともそれを考える時間は必要だった。

「お茶入れてくる。飲むでしょ」

「悪ィな」

幼い足取りで去ってゆく後ろ姿に何故だか和んでしまって、男は小さく笑った。一体何をしているんだろう、と思う。本当はもっと取り乱したりするべきなのかもしれないが、どうもこの空間は安らぐのだった。きっと自分は一人暮らしだったに違いない、思い出せないがそんな気がする。

（少しの間くらい、こういうのも悪くない）

不思議な子供だ。見ず知らずの男を家に上げておきながら、面倒まで見るという。警戒心のないのは幼さゆえか。トキに心を許してしまっている自分がいることに、男は気が付いていた。

数十秒後、平べったいステンレス製の皿に注がれた紅茶を目にした彼は、前言を撤回したくなるのだが。床に皿を置いて、子供は軽やかに言い放ったのだ。

「お飲み、ポチ」

「飲めるかぁァァ！」

3

トキは不可解な子供だった。幼い顔立ちとは裏腹に妙に肝が座っていたし、突然の同居人に戸惑うこともなくマイペースを貫いている。どちらかといえば、戸惑ったのは男の方だ。

“ポチ”と呼ばれることになった男がトキについて尋ねようとしても、うまく流されるばかりで決定的な情報は得られない。深く探ろうとすれば会話の内容をすり替えられて、気付けばすっかりトキのペースに乗せられている。男の衣食住はこの子供が保証してくれたが、彼自身の不安が拭われることはなかった。

トキの暮らしているのは２ＬＤＫ風呂付き、小さな商店街の裏にあるアパートの三階である。一人暮らしにしては広いほうではないだろうか。

（ここは何処なんだ）

その“一人暮らし”に終止符を打った彼は今、部屋の窓から見える景色をぼうっと眺めている。

初めて会った日にトキから聞いたこの家の住所は、全く聞き覚えのないものだった。こうして窓から見える切り取られた空間にも、見覚えのあるものは何一つ無い。彼の住んでいた（はずの）家から近いのに忘れているのか、本当に見知らぬ土地なのかさえ判別不能である。

この家の主に拾われてから、ポチと言う名を与えられてから、一体どれくらいが経ったのか彼にはわからなかった。記憶が抜け落ちるのと同時に体内時計はすっかりイカレてしまったようで、外の明るさを見ないと昼か夜かも判別できない有様だ。

おまけに何故か、この家には時計が無い。唯一トキが腕時計を持っているのだが、いちいち時間を尋ねるのも憚られて時々しか聞けなかった（最後に教えてもらった時刻は二時だ）。

男はそっと溜め息を吐く。自らの置かれた状況がいかに絶望的かを

実感した。名前もわからない、家もわからない、一歩この場所を出ても行くあてさえ無い。今“ポチ”が信じられるのは、“飼い主”だけなのだ。

さてその飼い主はというと、現在は熱心に読書に耽っている。何を読んでいるのかといえば国語の教科書で、その表紙は彼にも見覚えがあるものだった。

（……あれ？）

覚えてる物、あったじゃねェか俺。心の中で呟きながら、彼はその教科書をまじまじと見つめてみた。背表紙に書かれたタイトルは『中学二年・国語“あすなろ”』――読み取って確信に変わった。やはり知っている。男はこれを使ったことがあるのだ（同時に文字の読み書きは無事であることも確認された）。

正直こんなもの知っていたところで意味はないのだが、何となく気になった。“ご主人様”の機嫌を損ねるのは覚悟の上で、彼は恐る恐る口を開く。

「……お前、中二なの」

ちらりとトキの視線がこちらに投げ掛けられる。耳を傾けてもらえるうちにと、男は続けて声を出した。

「俺も使ってたんだ、その教科書」

もう七、八年は前のことになるはずなので、中身は改訂されているのだろうが。

「……そう」

「今いくつ？」

「……十三」

トキの視線が再び本に戻され、会話はそこで終了だった。この子供に関する情報が一つ増えただけでも良しとしよう、男は一人こっそり頷いておく。

ただし忘れてはいけない、彼が一番に欲しているのは自分自身の情報だ。

そろそろ情報収集に出たい、と切実に思う。彼がベッドの上で目を覚まして以来、トキは一度もこの家を出ていない。それは男も同じで、寝床として貸してもらえたソファーの上で頭を捻ってばかりいた（あのベッドはトキの物だったらしい）。何か一つでも思い出しやしないかと必死だったのだ。
結局は努力虚しく何もわからずじまいで、現状は一歩たりとも進展していない。そろそろ外に出るなり道行く人に情報を請うなりしなければならないだろう。あまり頼りたくはないが警察でも良い、と彼は思った。
（……そーだよ、警察）
普通は一番に駆け込むべき場所だ。記憶喪失で帰れません、などと言っても狂言だと思われるかもしれないが、身内ぐらい探してくれるかもしれない。彼の顔を覚えている警察官だって、何処かにいるかもしれなかった。飲酒で行き倒れた前科があるので。
――そうだ俺、自分の酒癖が最悪なことは覚えてるんだよな。
口元に手をやりながら男は一人ごちた。どうやら記憶は完全に消えているわけではなく、極一部残った部分もあるらしい。外に出て刺激されれば、もっと何か思い出すことがあるはずだ。
そうと決まれば、と。意を決して彼は口を開く。
「おい」
「……」
「おいってば」
「……」
「……トキ」
なぁに、ポチ。言いながらやっと顔を上げた子供がにこりと笑った。
どうあっても彼に名前を呼ばせたかったらしい。こういうところは本当に子供なんだなと男は苦笑する。
「俺、外に行きたいんだけど」
「散歩ってこと？　まだリード買ってないし、トイレなら家の中に

あるんだからわざわざ……」
「んなわけあるかァァ！！」
完璧な犬扱いに眩暈がしそうだった。思い切り叫んだ男にトキは冗談だよ、と笑ってみせる。先刻の素直な笑顔とは別の、口の端だけを吊り上げた嫌な笑みだ。
この子供は本当に自分をペットにしたいのだろうか、考えて彼は虚しくなる。トキなら本当にやりかねない。何故だろう、まだ短い付き合いだが、不思議と男にはこの子供のことがわかる気がした。
「マジ勘弁してくれる……」
「リードと首輪じゃ不満？　格好良くメタリックな鎖にしようか」
「いらねェよ！！」
「……前から思ってたけど、テンション高いねポチ」
誰のせいだ。
男はがっくりと脱力した。正直疲れているのだ、気のせいかずっと身体が重く息苦しい。それでも会話にいちいち大袈裟なリアクションを挟むのは、自分を鼓舞する意味もあった。
トキの（軽いイジメのような）言葉に言い返す気力を失ったら終わりだ、漠然と彼は思う。憂鬱になってはいけない。一度落ち込んだらもう這い上がれない、そんな気がしていたのだ。
「ホント、外行きたいんだけど」
「……どうして」
どうしてって、言わせるのかそれを。
男は目を瞬いた。自分が落とした記憶の破片を探そうとする、その行為は至極当然のことだ。この子供だってそれはわかっているだろうに。
ぽかんとする彼の目の前で、トキの顔がほんの少しだけ歪んだ。ぎょっと目を見開いた時には何事もなかったかのように、いつもの何を考えているのかわからない表情に戻っていたのだが。
「……トキ」
「夕飯何食べたい？」

「無視！？」
ここで終わらせてたまるかと慌てて立ち上がった彼を、煩わしそうにトキは見返した。そこまで嫌そうな顔しなくても良いじゃないか、半ば悲しくなりながら男は思う。
ぱたん、軽い音を立て国語の教科書を閉じると、トキは静かに立ち上がる。このまま逃げられてしまいそうだった。
「おい！」
「……あした、」
男に背を向けたまま、ぽつりと零された声は小さい。彼は耳をそばだてその音を拾った。
「じゃあ明日、連れて行ってあげる」
そのままキッチンの方へ消えた小さな後ろ姿を、男は黙って見送った。最後に零された声の儚さが意外で反応に困ってしまう。
（何なんだ、一体）
もしかしてあの子供は寂しかったのかもしれない、と彼は思った。理由はわからないが、中学生の一人暮らし。自炊はできるようだがきっと不安だってあるだろう、真偽のほどを確かめる術はないのだが。
部屋に一人取り残されて何となく視線を彷徨わせると、それがある一点で制止する。トキの置いていった、国語の教科書だ。男はその裏表紙に目を落とした。先刻までトキの掌に隠されていた辺りに、油性ペンで小さな文字が書き込まれている。よく目を凝らせばどうにか、カタカナだというのがわかった。
「トキ……トウ？」

“トキトウ　ミハル”

4

（みはる？　ミハルって）

……誰だよ。小さく呟いて首を横に振る。わかるわけがない。

教科書に書かれたその名前を見つけて以来、男の脳内にはエンドレスでその問いが回っていた。トキトウミハル、はあの教科書の持ち主に違いない。名前の響きからして、おそらくは。

（……女、だよなァ）

トキに姉、もしくは妹でもいるのだろうか。または友達のことか――そこまで考えて、待てよ、と男はひとりごちる。

十三歳。一番最近得たトキの情報がそれだ。トキは中学二年生、あの教科書は、二年の生徒が使用するもの。

（……待て待て待て）

男はその可能性に気が付いて身体を強ばらせた。あの教科書が、トキ本人の持ち物だとしたら？　そう考えたほうが自然だ。ただ一つ、彼の見落としていた点を除けば。まさか、あの子供。

「……お、」

女の子！？

叫びだしそうになった口を両手で押さえ付ける。男の中で全てが繋がったような気がした。

本がトキの物ならば、あの子供は名をミハルと言うらしい。カタカナ表記であった為に漢字はわからないが、先刻から述べている通りその響きは女児の名に多いものだった。今の世の中に中性的な名が流行っているからといっても、おそらく間違いはないだろう。

僕、という一人称と俺様全開の毒舌に騙され疑いもしなかったが、考えれば考えるほどそれは真実味を帯びてくる。細い手足、白い肌と丸い瞳。中性的な顔立ちの美少年（に見えていた）、は女顔と言ってしまえばそれまでだ。今や男は自信を持って確信していた。あれは、少女なのだと（女顔？　そうとも、女なのだから！）。

だとすれば、トキ、というのは姓の“トキトウ”（字は時任、に違いない）から派生したあだ名と言うことか。何故トキが本名を名乗らなかったのかはわからないが、それが本名を知られたくないという意味ならまずいことをしたと彼は思う。

（薄々感じてはいたが）

……マジかよ。小さく零した声は誰に聞かれることもなく消える。今更ながら、この状況に男は焦りを感じた。トキの性別が女である、それは常識的に考えて非常にまずい。

いくら事情があるからといって、一人暮らしの年頃の少女（というには些か早いかもしれないが）と赤の他人である成人男性が一つ屋根の下。男にやましい考えはこれっぽっちも無い。無いが、これが世間に露呈したときの事を考えると恐ろしかった。

「何ぼーっとしてんの、ポチ」

「……え、あ、イヤ」

昨日の約束通り出かける支度を整えているトキを見て、男はばれないように溜め息を吐いた。その華奢な体は少年の着るような緩いトレーナーに覆われてはいるものの、よく見れば上半身に男には無い滑らかな凹凸がある。

「何？　さっきから人のことジロジロ見て」

「な、んでもねーよ」

「嘘だ。何なの？　言わなきゃヘンタイがいるって警察に突き出す」

お巡りさァァん、ここにヘンタイがいますぅぅ！

次の瞬間、トキは表情を全く変えずに声を張り上げた。言っている本人が無表情とは思えぬほどその声は演技がかっていて、近所の人間が聞けば誤解を招きそうだ。まずいな、と思っていたところにこの仕打ち。勘弁してほしい。

言う、言からやめろ！　叫慌てて叫んで制止する男を見て、トキは満足そうに口を閉じる。

「で？」

「……お前さ、」

ミハルって名前なの？
言った瞬間、しまった、と男は思った。トキの表情がみるみるうちに凍り付いて、さっと影が過ったからだ。
「……なんで」
何で知ってるの。硬い声で問われたので慌てて教科書のことを説明する。彼がざっと話終えた後には不思議と、子供の表情は幾分か和らいでいた。
「……そ。良いんだ、僕はトキだよ」
違う名前で呼ばれても、僕って気がしないんだよね。そう言って笑った子供が最後、良かった、と小さく呟いたのを男は聞いていた。
何が良いのかは、全くわからなかった。

5

「ん」

「……何これ。どゆこと」

差し出された掌をみて男は絶句する。念願叶って外へ出ることになった、その第一歩を踏みだそうかという時だった。アパートの薄い扉を前に思わず彼は視線を泳がせる。トキは真直ぐ手を伸ばしたまま、丸い瞳でじっと男を見つめていた。

この子供の言いたいことはわかる。わかるが、なぜ。

「……手を繋ぐ必要が、どこにあるんデスカ」

俺、もう良い大人なんだけど。言いながら彼の背を嫌な汗が伝う。いくら記憶喪失という爆弾を抱えていても、手を引いてもらう必要などないはずだ。断じてないはずだ。トキが同伴するという時点で迷うことはありえないし、現段階で男の帰る家はここだけなのだから、逃げ出すのではと心配される必要もない。

「いやいや、これは無いんじゃないかな」

リードの代わりと言う意味だろうか。本気で悩んで悲しくなっている男の手を、待つのに飽きたのだろう、トキは無理矢理握った。

「絶対おかしいってこれ」

絵的にさ。と懸命に説明しても相手の子供は何処吹く風、「仲の良いきょーだいに見えるかもしれないじゃん」などと飄々と言い放つ。少女誘拐の犯人の間違いではないだろうか。想像して男は青くなった。

「良いから繋ぐの。繋がなきゃ、行かない」

ついにトキが不機嫌に顔を歪めた。頑固者め、心中で舌打ちしたのち、とうとう男は諦める。

トキは淋しい子供だ。そしてきっと、うまく甘えられない子供なのだ。そう考えればこの行動も可愛く思えてくる。どうせこの家の“法律”に逆らっても彼にメリットはないのだから、珍しい体験がで

きると思って妥協することにした。
「……ホントに外、行きたいの？」
この後に及んで乗り気でない様子のトキに男は曖昧に笑う。この子は何故、こうも外の世界を嫌うのだろう。
「ポチは何にも覚えてないんだ。この家を出てもわからないものが増えるだけなのに」
「そうかもな」
「外を歩いて、自分のことを知ってる相手が運良く見つかると思ってんの？　警察行くにしたって、一人暮らしの子供の家にいます、なんて言えないくせに」
「な……っ」
こいつ、わかってやがったのか。男は思わず舌打ちしそうになる。彼が世話になっているのは子供、親は別居、おまけに女子中学生だ。言葉だけ並べれば犯罪の臭いがぷんぷんする。
警察はまずい、それは彼の中で一つの答えとして導きだされようとしていたことだった。トキはそこをピンポイントで抉ってくる。ハァ、彼は小さく溜息を吐いた。
「そんなに外は嫌か……」
「……別に」
「まァ聞け」
男は子供の頭をぽんぽんと撫でた。トキがくすぐったそうに身を捩る。
「どうも俺な、全部を忘れてるわけじゃないらしい。自分の酒癖は覚えてたし、歳もわかる。お前が読んでた教科書、アレにだって見覚えがあった」
些細なきっかけで思い出せるかもしれないんだ、と彼はトキに言い聞かせる。
「外に出ることはきっと俺にとってプラスになる――頼むよ、トキ」
「……しょーがないなァ」
行くよ、ポチ。言いながらきゅっと握られた手はお互いひんやりと

していた。そういえば自分は平熱が低かった、それを思い出して彼は笑う。ほら、また一つ思い出したじゃないか。

（役に立たねーけど）

トキも体温は低いほうらしい。子供は温かいというイメージを持っていた彼にはそれが意外だった。

トキの空いているほうの小さな手が扉を開いて、閉鎖された世界は外と一つになる。何処か硬い表情を浮かべた子供の横顔を、男は前に見たことがある気がした。

6

久々に吸った外の空気は別段変わった味もせず、ただ太陽だけが眩しかった。男は思い切り伸びをする。彼の片手は繋がれたままだったので、空いているほうだけで。

長い間室内にいたせいだろうか、一瞬くらりときて顔をしかめる。どうも身体が重いのだ。気分転換でもすれば改善されるかと、男は外の世界にもう一度目をやった。

狭いアパートの階段をゆっくり下りると（手を繋いだ状態だったので骨が折れた）細い路地になっていて、それが商店街まで続くようだ。意外と活気のある場所らしい。トキの家が静かなので気が付かなかったが、沢山の人間がそこを行き来しているのが男にも見えた。

「こっち」

「え」

しかしトキが進んだのは、商店街とは真逆の方向である。男の見ていた賑やかな場所とは違い、そちらには人影もなかった。

何処へ行く気だろう、彼はぼんやり思う。最早この子供に逆らう気など起こらなかったので、身体はおとなしく引かれるままになっていたが。

「そっち誰もいねェけど」

「良いの」

人混みはダメなんだよ。強い調子で言い切るトキを、男はただ見つめることしかできなかった。

路地を抜けた所にあったのは閑静な住宅街だ。街路樹の美しい並木道を、時折老人や買い物袋を提げた主婦がぽつぽつと通る。

どの景色にも見覚えはなかった。わかってはいてもやはり辛いと、男は小さく嘆息する。それを耳聡く聞き咎めたのか、トキがさっと彼の顔を仰いだ。

「疲れた？」
「いや」
平気だ、と笑ってみせるとトキはふいと顔を逸らしてしまう。そんな様子に苦笑を零しつつ、男は子供の綺麗な旋毛に視線を落とした。常識的に考えて成人の男が疲れるほど、この散歩をはじめてから時間は経っていない。それでも彼を気にする素振りを見せる、この聡い子供はきっと気付いているのだろう（照れ臭いのか態度はそっけないが）、男の体調が何処か優れないことに。目を覚まして以来ずっと身体が重たいのは、落としてしまった記憶に関連しているのかもしれなかった。
「トキ。お前さ、学校は」
何となく手持ちぶさたで、男は気になったことを問い掛けてみる。何か喋っていれば気分も紛れるだろうと思った。ゆっくりとした歩みは二人とも止めないまま。
「行ってたよ」
「……え、今は？」
二度目の質問は無言で拒絶された。まさかサボりなのか、はたまた登校拒否なのか。前者ならきっと自分のせい、後者ならどうにかしてやらねばならないと男は頭を悩ませる。すっかり兄貴分のような心持ちだ（実際は居候兼ペットの扱いなのだから笑わせるが）。あまり触れられたくない話題なのか、トキはさらりと会話の方向を転換した。
「何か思い出しそう？」
「んー。まだ特には……あ」
ふと目に入った物体に男は足を止める。道路の端に一台のバイクが停めてあった。触りたいな、と思う。何故かはわからないが、今は本能に忠実に従うべきだろう（野生動物になったみたいだ、と彼は自嘲した）。
彼がそちらに歩み寄ろうとすると突然、トキがぎゅっと握る手の力を強めた。

「……え、何」
「ねこ……」
言われて見てみれば、バイクの影に茶色い毛玉が丸まっている。よく見ればその表面が穏やかに上下していた。なるほど、確かに猫だ。
「何、猫ダメなのかよ」
「別にどっちでも……でも、ポチは」
ポチは猫、好きだよね。柔らかく言われて考えてみる。何故質問ではなく断言なのか、不思議に思いつつも確かに彼は猫が嫌いではないような気がした。好きかもしれない、どちらかというと。動物全般が好きなような気までしてくる。
「……言われてみるとそうかも」
「やっぱね」
「何でわかンだよ」
「そんな気がしただけー」
トキはコロコロと笑う。その笑顔は歳相応で可愛らしかったが、どうも男は釈然としなかった。見透かされているようで面白くない。そんなに自分はわかりやすいだろうか。
「何だよ……俺、お前と会ったことあるっけ？」
「……冗談」
軽いジョークのつもりで言ったら一刀両断された。低レベルなナンパみたいなこと言わないでよ、と止めまで刺される。女の子は手厳しい。
気を取り直して男は再びバイクに歩み寄った。すぐ傍まで近づいても、猫は全く目覚める気配が無い。人慣れしているのか、熟睡のあまり気が付かないのか。後者ならかなりの大物だ。
男はバイクに手を伸ばす。触れる寸前、またトキが手に力を込めた気がした。
「……っ」
それに指が届いた瞬間ぴりりとした痛みを感じた、ような気がした。それはほんの一瞬で、直後男は頭の内側を金属バットで殴られたよ

うな衝撃を覚える。
「ポチ？」
遠くで声が聞こえたが返事などできなかった。これを、このバイクを何処かで俺は？
誰の物かもわからない（仮に自分の物だとしてもわからない）バイクの、座席に触れた指先が震える。この感覚を知っている、漠然と男は思う。知っているのに思い出せないのだ。考えれば考えるほどわからない。
（畜生、）
心の中で精一杯の悪態を吐いた。胸が苦しい、と彼は思う。頭が痛い、息苦しさも増している。身体が重くて自分のものじゃ無いみたいだ。
「――ポチ！」
切羽詰まったような声が聞こえて、同時に無理矢理指を引き剥がされた。その声の主が隣の子供だということに気が付くまで時間が掛かる。驚いて目を瞬いた男の視界一杯に、泣きそうな顔が映り込んだ。
え、なに、何で？　不意を突かれて動揺する男に、震えを押さえたような細い声がかけられる。
「アンタ、疲れてるんだよ。ちょっと、休憩しよ……ね、ポチ」
公園があるから。そういって歩きだした子供に再び手を引かれ、男はその場を後にした。
「トキ……？」
どうしてしまったんだろうか、とそれだけを思う。真実を知る瞬間が近付いていることに、その時まだ彼は気が付いていなかった。

7

半ば引き摺られるようにして辿り着いた、こじんまりとした公園は住宅街に溶け込んでいた。その区画一帯を被った木々の若葉が眩しい。今季節はどの辺りに差し掛かっているのだろう、男はぼんやりと考える。

公園に面した通りの向こうは少し広くなっていて、そこに寂れた交番が建っていた。一応人の気配はするものの、のんびりとした空気が充満している。空き巣でもない限りは仕事もないのだろう、平和なものだ。

トキと並んで朽ちかけたベンチに腰を下ろし、男は大きく息を吐き出した。先刻のあの妙な気分はなんだったのか、考えてみてもわからない。具合は幾分か良くなったが、頭は鈍痛を抱えたままだった。

（バイク）

原因はそう、あのバイクである。あれが男の失った記憶の一端を担っているのかはわからないが、もしそうだとしたら。

（……俺ってバイク好きだったとか？）

それがどーした、自分で突っ込みを入れて彼は悲しくなった。一歩も進めてなどいない。

「大丈夫、ポチ」

語尾は上げない、けれど心配しているのだとわかる声色で子供が問う。男は曖昧に笑ってみせながら、眉を寄せているトキの頭をくしゃくしゃと掻き回した。さらさらと崩れていく髪の毛は手触りが良い。

「……ポチ」

「んー？」

おとなしくされるがままになっていたトキが、具合が悪いんでしょう、と呟いた。やけに真剣な響きを帯びたそれに、動きっぱなしだ

った男の手が止まる。
「今日はもう、帰ろーよ」
「……なんで」
彼が尋ねた途端、ぱつが悪そうにトキがふいと視線をそらした。どうした？　彼が極力柔らかく問えば、だってと子供が口を噛む。
「……もし、だけど。ポチの記憶が無いのってさ、キッカケのある一時的なもんじゃなくて……なんか、悪い病気だったりしたら」
「……そいつァ考えてなかったな」
ぽりぽりと鼻の頭を引っ掻きながら、だったらどーしよ、と他人事のように考える。そのどうでも良さそうな態度が気に入らなかったのか、トキは男を軽くねめつけるように言葉を紡いだ。
「何かヤバい病気だったとしても、ポチがそんなんじゃ病院になんか行けないでしょ。保険証が無いどころか自分の名前もわかんないんだ、精神病院にはブチ込んでくれるかもしれないけど、ね！」
「……お、っまえなー」
軽くへコむんですけど！
男の訴えは綺麗に無視してトキは一言、だから帰ろ、と付け足した。体調が悪化する前に、という意味なのだろうが。
はぁぁ。彼は子供の頑なな様子に深い溜め息を吐く。トキが本当に自分の身体を心配しているのか、単にトキ自身が外に居たくないのか、男には判別ができなかった。子供はわからない、とこっそり心中で独りごちる。
「あー……、オッケ、わかった。帰りゃ良いんだろう」
結局折れたのは彼の方だった。事実身体は不調を訴えていたし、精神的にも疲れは溜まっている。どうしてだろう、時間が経てば経つほど身体に感じる重さは深刻になってゆくようだった。
たとえ今日を逃しても次が無い、なんてことはないはずだ。今日は身体を休めてまた出直そうと、男の中で一つ答えがまとまる。
「水飲んでくるから」
そしたら帰るよ。

視界の端に水道を捉えながら男はベンチから立ち上がった。同時に結ばれたままだった子供の手をやんわりと解く。瞬間、慌てたようにトキが立ち上がった。勢い良く伸ばされた小さな手が男の服に辿り着いて、その裾をしっかりと握り締める。
「ど……こ、行くの」
「え、いや、だから水飲みに……」
震えた声を聞いて彼はぎょっとした。振り向いて見た能面のような顔は、心なしか青ざめている。
――トキは酷く狼狽していた。それに気付いて男はもっと狼狽える。
（何！　何かしたか俺！？）
動揺を悟られまいとなけなしのプライドで平静を装いながら、内心はすっかり困惑していた。取り敢えず男は子供の頭を撫でてみることにする。先刻から触れてばかりだとぼんやり思うが、当のトキには痴漢だとかセクハラだとか、通常なら飛び出してきそうな暴言を吐く余裕もないらしい。
「……トキ？」
これはいよいよ様子がおかしい。男が考えた瞬間に、トキが小さな唇を開いた。
「……、は」
「うん？」
「そっちは、駄目だ」
いつものまっさらな表情がみるみる変わって、子供に濃い焦燥の色が浮かんだ。こっそり男が手を解こうとしていたのに気付いたのか、よりきつく掌を握り締める。
「一人で行っちゃ駄目。行きたいなら、僕も一緒に行く」
「……あっちに何かあんのか？」
問うと、子供はふるふると首を横に振った。それから俯いてただ駄目だと繰り返す。
変だな――純粋に、変だと男は思った。たとえトキが置いていかれる事を怖がる可哀想な子供だとしても、これは異常だった。何処へ

消えるわけでもない、ただほんの十数メートル先の水道に行くのにどうして同伴が必要だろうか。
（なんで、こんな）
そこまで考えて、男は一つの可能性を掬い上げる。それを確認するために彼は言葉を選び、ゆっくりと舌に乗せた。
――思えば最初から不可解だったのだ、この子供の言うこと全て。
「お前……何を隠してる？」

8

「……っ！」
びくりと震えた小さな身体に正解を知る。舌打ちしたい衝動に駆られるのを飲み下し、彼は喉の奥からくぐもった声を絞り出した。
今までずっと何か、隠してきたんだろう？
「……俺をおちょくってんのか？」
ふつふつと沸き上がった感情が知らず籠もったらしい。トキの身体が小さく跳ねたと気付いたときには、もう遅かった。
「――そ、んなこと、ない！」
思わず声を荒げた子供の真剣な表情を見れば、それが嘘でないことはわかる。冗談や揶揄ではない、何か特別な事情があるのは間違いなかった。そしてトキはそれを、隠しているのだ。
瞬間頭にカッと血が上って、男は子供の手を勢い良く振り払った。ぱしりと音を立てて弾かれた掌にトキが一瞬傷ついたような表情を浮かべて、やりすぎた、と後悔する。
けれど謝りはしなかった。彼の頭の中を占めている最重要事項は自らの記憶で、それを捜し当てるためにどんな些細な情報でも見落とせないと思っている。それを一番の情報源である子供に――記憶の無い彼の、唯一の理解者であるトキに隠し事などされていたとしたら。これで平気でなど、いられるはずがあるだろうか。
いくら彼でも、それがトキの個人情報ならば根掘り葉掘り聞き出そうと気はない。男は確信していた。トキが今まで秘密にしていたそれは、彼自身に関わることなのだと。
「ポチ、」
「……触んな」
今度こそトキの顔が泣きそうに歪んだ。流石に可哀想になって誤魔化すように、俺は一人でも歩ける、と言葉を付け足す。
俯いてしまった子供と男の間に沈黙が流れた。問い詰めるタイミン

グを逃してしまったらしい。いつの間にか喉の渇きも消え失せてしまって、いたたまれなくなった彼は視線を彷徨わせる。何処を見ても木と土ばかりで、最終的に視界に残ったのは寂れた交番だった。そこからのんびりと恰幅の良い婦人警官が外に出てくる。

「あー……、ええと」

どうにかこの場を切り抜けたい男は、その婦警に声をかけることを思い立った。いっそ腹を括って、記憶喪失について相談してしまっても良いかなと思う。あののんびりした様子なら、少しくらい込み入った話にも付き合ってくれるのではないだろうか。トキと自分の関係を話すのは面倒なので、ボケた迷子の老人でも保護したことにして、そういう場合警察はどんな対応をしてくれるのか聞いてみるのも良いかもしれない。

（……つーかそれ良くね？）

頭の中を閃光が走ったようだった（ひらめいた、というのはまさにこんな感じに違いない）。どうしてもっと早く気付かなかったのだろう、と男は思う。同時に考え付いた自分を大袈裟に誉めてやりたくなった。そう、何も馬鹿正直に自分は記憶喪失なのだとカミングアウトしなくとも構わないではないか。

「俺、ちょっとあの人と喋ってくるから」

そうと決まれば躊躇う必要はない。一刻も早くこの空気から抜け出したかった男の決断は早かった。

ついて来んなよ。そう彼が言い放つのと、目の前の子供がばっと顔を上げたのは同時。そのまま背を向けた彼は、トキの丸い瞳が極限まで見開かれていたことに気付かなかった。

「ポチ、待って」

細い声が背中から追い掛けてきても男は振り向かない。これ以上この子供に振り回されてたまるかと、半ば意地になっていたのだ。

「行っちゃ嫌だ、」

婦警は男の存在に気付いたのか、真直ぐこちらへと歩いて来ていた。待って、と弱い声が未だに彼を追い掛けている。トキ自身は地面に

縫い止められたかのように、ベンチの前から動かないままだった。
「行かないで、ポチ……！」
悲愴に満ちた声を必死で無視して男は前を見据える。婦警の顔がはっきり識別できる位置まで距離を詰めたことを確認すると、自分の存在をアピールするように軽く手を挙げた。にっこりと親しげに会釈してみせてから声をかける。
「あの、すんません」
確実に届いたであろう声に、しかし婦警は歩みを止めなかった。彼に向かって真直ぐに、ずんずんと近づいてくる。
ちょっと待て。違和感に気付いて男は息を呑んだ。何故彼女は立ち止まらないのか。気のせいだろうか、婦警の目線はこちらに合っていない。
（……てゆーか近いんですけどォォ！）
そのまま前進を続けた婦警との距離は、気付けばついに残すところ三十センチを切っていた。しかし次の瞬間、男は我が目を疑うことになる。
――婦警が彼の顎に頭突きを食らわせたはずの、まさにその瞬間に、彼の視界から彼女は消え失せてしまったのだから。
「……え？」
思わずきょろきょろと辺りを見回して愕然とした。消えたはずの婦警は男の後ろ側を、何事もなかったかのように歩いていたのだ。ちょうど彼に背中を向け、のしのしと一定のリズムでその場から遠ざかっていく。
まるで男の存在など、無いものであるかのように。
「……な、ま、」
何なんだ一体、と、まさかそんなはずはない、という言葉が同時に口から飛び出そうとして失敗する。
必死で否定しようとしても、気付いてしまった“それ”は男に現実

を突き付けた。身体の奥底が震える。からっぽの、からだが。
――消えたんじゃ、ない。婦警は彼の身体を、“通り抜けた”のだ。
悪夢でももう少しはましに違いなかった。男の手足から急激に力が抜けてゆく。
「だから」
呆然と立ち尽くす男の、すぐ側から冷えた声が聞こえた。緩慢な動作で首を捻れば、色素の薄い小さな頭が見える。
「――行っちゃ駄目だって、言ったじゃない」
トキは漆黒に濡れた瞳で、真直ぐ男を見つめていた。

9

どこをどんなふうに、どうやって帰ったのか覚えていない。気付けば彼はあの殺風景な部屋のベッドに膝を立てて座っていて、それを目の前の子供はじっと見つめていたのだった。
トキ。小さく呼んでみた声は情けなく擦れている。しかしちゃんと相手に届きはしたのだろう、丸い瞳が応えるように一つ、ゆるりと瞬いた。
「トキ」
「うん」
「……、」
男は怖かった。さっき自分に何が起こったのか、それを認めて口にするのが怖かった。けれど曖昧なまま漂うような、今の状態はもっと怖い。
暫しの逡巡の後、彼はとうとうその重い唇を開いた。目の前の子供がどこまでを知っているのかはわからない。だが彼よりはずっと、見えているものがあるはずだった。
――だから、行っちゃ駄目だって言ったじゃない。
そう言った子供の瞳に浮かんでいた絶望が、男の頭から離れなかった。
「トキ、俺は――」
俺は、何なんだ？
問うと子供は僅かに目を伏せる。きゅっと寄せられた眉が痛々しい表情を作り上げた。
言いたくない。ぽつりと零された声は弱々しく泣きそうで、それでも涙は流さない。強情な子供は頑なに首を横に降り続けたが、頼む、と繰り返し紡がれた男の言葉についに諦めたようだった。
「……バカにしないで聞いてよ」
「当たり前だろう」

「きっと信じない」
「信じるよ」
真摯に聞こうとする姿勢を見せれば、トキは小さく溜め息を吐く。何度か瞬きを繰り返して男の態度が変わらないのを見ると、ようやくその唇を開いた。
「……この世には、二種類の魂がある」
「……は」
はぁ、と間抜けな音に変わりかけた声を慌てて『はい』に変更する。トキがじろりと男を睨むので、苦笑いを浮かべながら先を促した。
「その違いは密度だよ。エネルギーの強さ、ってゆーか……元気の良さみたいな。生きているものの魂は活発で存在感があるし、反対に死んでしまったものの魂は陰っていて、存在も薄弱になってしまう」
やけに具体的な説明だ。思って男は苦笑する。突拍子もない話が始まったように見えるが、実は薄々“そっち”の話ではないかと思っていたので衝撃は少なかった。けれどそれを口にするのがこのいとけない子供だと思うと、どうにも妙な感じだ。
「弱い魂は強い魂に負けてしまって、世界に影響を及ぼすことができなくなるんだ。生きている人間に触れられないし、物にも触れない――」
「……ちょ、タンマ」
漸くトキの言わんとしていることに気が付いて、男は思わず頭を抱えた。
「つまりアレか、お前はその……俺が、」
「人の話は最後まで聞く」
「ハイ……」
有無を言わせず黙らせて、小さくトキは笑みを浮かべた。こんな時までこの子供はご主人様属性だ。男も苦笑して続きを促す。重たい空気のまま真実を突き付けられるよりは、幾分幸せな気がした。
「稀にだけど、死んでしまった者の魂の中にも強いエネルギーを持

っているやつがいて、現世の物体や人間に触れることもできる。ポルターガイストとか知ってるでしょ、アレはそういうのの仕業なわけ。でも余程特別な場合じゃないと、姿を生きてる人間に認識させることはできない」
つまりポチ、アンタの今の状態はね。
そこでトキは一度言葉を切る。男の反応を見ているようだった。痛いほど真っすぐな視線に射ぬかれて居心地の悪さを感じつつ、彼は大丈夫だと頷いてみせる。続きを、と。
「……ポチの肉体は、ここにはない」
「……、」
「ポチは魂だけの状態になって、この世を彷徨ってる」
「……つまり、」
俺は死んだのか？
腹を括って問い掛けた男に返ってきたのは、「残念だけど」の一言だった。
（……そうか）
そうなのか。
呟いて彼は掌に視線を落とす。おれはしんだのか。もう一度言ってみても実感はなかった。なんて、呆気ない。
「……って、ちょっと待て！」
茫然とした頭で全てを受け入れようとする、その寸前に男はおかしな点に気が付いた。仮に自分が死んでいたとしよう（だってそうでもなければ婦警にすり抜けられたこの身体は説明できない）。そうだとして、この目の前の子供は何だ。
「お前には俺の事が見えてる！　それにトキには俺、触れるじゃねーか。メシだって食ったし、このベッドだって」
「……僕は……、」
子供はまた言い淀んで、ふいと視線をそらしてしまった。それでも直ぐに顔を上げ、真直ぐ男を見つめてみせる。
「僕は、例外なんだ。ちょっと特別な魂を持ってる」

「トクベツ？」
「僕の魂の密度は、普通の人間よりずっと大きかった。昔からそうだったんだ、魂が、身体から溢れちゃうくらいエネルギーを持ってる」
他の弱い魂たちに、分けてあげられるくらいにね。
一息に言い切った、トキの顔がまた歪んだ。本当は言いたくなかった。そう言われた気がして、男の胸が微かに軋む。
「強い魂には、弱いものがひかれて集まってくる。僕はずっと、そういうものを見ながら生きてた……」
「……トキ」
お前は、“そういうもの”が見える人間なんだな。
問えば子供は小さく頷いた。俯いた頭を撫でてやりたいと思いながら、男はゆっくりと自分のおかれた状況を自覚してゆく。
どうやら自分は、この子供の“魂”とやらに吸い寄せられて来たらしい。トキに触れていれば世界に触れることができる、それは子供から力を分け与えられていたからだ。けして離すなと言われた、やわく小さな掌を今更ながらに男は思い浮べた。
「僕に触ってなくても、僕の“所有物”にならポチは触れるよ。ベッドだってそう」
「……なるほどなァ」
うまく出来たもんだと苦笑を浮かべる、彼はもう全てを享受してしまっていた。
トキの住んでいるこの家は、言うなればトキの所有物だ。家具だってそういうことなのだろう。一度知ってしまえばそれは不思議なほど、すとんと彼の胸に納まった。
「じゃあお前、霊能力者、ってヤツなんだ。学校行かないのってそのせいなのかよ」
「……別に、そんなんじゃない」
むすりと答えたトキはばつの悪そうな表情を浮かべていて、強ち間違ってもいないのだろうと男は思う。外に出るのを拒んだのは、余

計なものが呼んでもいないのに集まってくるせいなのかもしれない。
“そういうもの”が見えることをトキ自身が望んでいないのだったら、それは苦痛以外の何でもないはずだった。だとしたら。
（可哀想なことをした）
こうして今傍にいる自分のことを思うとトキが気の毒だ。出ていったほうが良いのかな、男は真剣に考える。
「……それに僕、霊能者とは違うんだ」
「え？」
いきなり思考を引き戻された男は間抜けな声を上げる。トキは何故か申し訳なさそうに、呟くように言葉を紡いだ。
「見えるだけ。触れるだけ。霊能者なんてちゃんとしたもんじゃないから、成仏させてあげることなんてできないの」
「……じょーぶつ」
「魂が身体から抜け出るときに、記憶を落としてきちゃうのって良くあることなんだ。僕はポチを見つけたけど、でも」
あとは何にもできないよ。
ごめんなさいと謝られて面食らった。トキが男に謝罪する必要など、何処にもないのに。
小さな手が男の服に手を伸ばす。また叩き落とされないかと震えながら、彼にその気が無いことを知るとそっと裾を握り締めた。
「ここにいてよ、ポチ……」
一緒にいて。ひとりは、さみしい。
追い出されるのではないかとさえ思っていた男は、あえかなその言葉に酷く驚いた。幽霊と一緒でもつまらないだろうに、そう考えながらも小さく頷くとトキは安堵の息を吐く。
うっかりそれを可愛いと思ってしまって、先刻まで頭を占めていた事柄を呑気に削除した。男は考えていたのだ、ここを出て行く覚悟を決めようと。外に出てもどうにかなるはずだった。困ることなど、何一つない。
（だって俺、死んでるし）

そう、彼は死んだのだ。
世界とのさよならさえ、知らないうちに。

10

人間、本気を出せば空だって飛べる。

（……なんて、俺はもう“人間”とは言えないのかもしれないが）

男は空を仰ぎ見た。

“思い込み”とは結構な力を持っていたようで、今まで普通の人間と何ら変わらないように動いていた身体は、男の認識一つでずいぶんと特異な動きをするようになった。例えば歩行。地に足を着けるという感覚は、意識しなければ簡単に忘れることができる。自らの軽さと透過性を年頭においてその身体を浮かせることが出来た時には、彼は年甲斐もなくはしゃいでみたりした（トキからは冷たい目を向けられた）。

能天気だと、端から見れば思われるのだろうか。しかし男は自分の運命を受け入れてしまっていたのだ。トキの語った言葉はすとんと音を立て、不思議なほど簡単に彼の胸のうちに納まった。不自然だったのは寧ろ、今までの状態だったのだろう。

「あーあ」

欠伸混じりに思い切り伸びをする。空を飛ぶのは二日でやめた。飽きたわけではなく――どちらかと言えば楽しくて仕方がなかったのだが――酷く疲れる行為であることに気が付いたからだ。

死人が疲労する。何だかおかしい、と男は思う。その不安を言葉にしたことは、まだなかった。

トキと過ごす時間はひどく穏やかで、男にとっては安らぎの一時だった。柄じゃないとは思ったのだけれど。

何にも縛られることの無い身になって初めてわかる。自分は今までたくさんの物に触れながら、その本質を一つも理解せずに生きてきたのだ。
木漏れ日の煌めきや空の青さに、男はやっと気が付いた。生き物は暖かい。命のエネルギーは眩しくて、尊いものだった。

もう手は、届かない。

「ねぇ、死ぬのってどんな気分」
ある日の問い掛けは、この子供にしてはやけに真剣だったように思う。正直あまり自覚の無かった男は長時間考えた末に、勿体なかった、と答えを返した。
「へぇ。変わった感想だね」
「生きてりゃもっと色んな事があったかなァと思うとな。うん、悲しいとか怖いとかじゃねーよ、勿体ないカンジ」
もったいない。彼の言葉を繰り返した、子供の真意はわからない。けれど納得したように笑うから、どうやら彼の答えはお気に召したらしいと男は思うことにした。
「俺が生きてれば、成長してべっぴんになったお前といつか何処かで会ったかも知れねぇよなぁ」
「……だとしても僕が大人になる頃には、ポチなんてもうただのオヤジでしょ」
「オヤジ言うな！　……おーおー、そうだろうともさ。何せお前は現段階でまだまだお子ちゃまだからな」
「殺す」
「いやいやいや何この子、怖ッ！！　……ってアレ、俺もう死んで

るんだった」
冗談と本気の区別がつかない掛け合いも、憎まれ口ばかり叩く存在も、男にとってはかけがえの無いものだった。
生きているうちにこの子供に会いたかった。そう思うと少しだけ、切ない。

「トキ」
いつでも何処でも、呼べば茶色い頭がひょこりと現れた。以前に比べれば、この子供はだいぶ穏やかになったように感じる。相変わらずの王様ぶりを発揮してはいるが、ずっと素直になった。隠し事が無くなったからなのだろうか。
でも男はまだ、この子供について殆どを知らない。
「出かけようぜ」
「人混みはやだよ」
「わーってるって」
何度か繰り返すうちに手を繋ぐ事にも慣れた。緩やかに進行する共同生活の、始めに戸惑ったことを思えば懐かしい。
彼を必要とする子供から離れる理由はなかった。どのみちこの世には、もう居場所など無い身だ。平穏な現状を維持することが、どう見ても幸せな選択である。
……予感はあった。けれど男はそれを、この子供に告げる気などない。
「行くよ、ポチ」
笑うトキに連れられて家を出る。ほんの一瞬だけ襲った眩暈に、彼は気付かぬふりをした。

いつまでこのままでいられるのかわからない。

この世に留まっていられる保証など、実は何処にもない。
霊体にも関わらず不調を訴え続ける身体が、そのリミットを示しているような気がした。そんなこと、寂しがりの子供には伝えられない。

時間が欲しかった。
どうかまだ、このままで。

11

時間が、無い。

トキの為に、何かしてやりたいと思った。
男は手に持ったマグカップをゆっくり持ち上げる。トキの私物、シンプルな白地に赤のラインが入ったそれの中には並々とコーヒーが注がれていた。小さく音を立てながら一口、唇を付けて中身をすする。男の好みを考慮して濃い目に入れられたはずのそれはしかし、何だか酷く味気ない気がした。
ふぅ、男は小さく息を吐く。馬鹿になった舌には早々に見切りを付けていた。彼が“それ”を自覚してからというもの、ずっとそうだったので。

男は死んでいるらしい。
それに彼自身が気付いた、気付かざるをえなかったその翌日、突然彼の指先から感覚が消えた。
ショックを受けたわけではない。むしろ、ああ来たか、と思った程度である。今まで自分が生きていると思い込んでいた、トキの力を借りて身体の異変を誤魔化していた、そのツケが回ってきたのだと

感じた。
指の次は足、それから舌だ。視界にはっきり確認できる彼の身体は、今や実態の無い虚像と変わらなかった。あぁマジで幽霊っぽいなァ。ぼんやりと男は思う。
「ポチ、良い天気だよ」
呟くようにトキが言った。カーテンの隙間から柔らかな光が差し込む。時間の感覚が酷く曖昧になってしまった男には、辛うじて朝らしいということだけがわかった。
返事を返しながら、子供の頭をくしゃりと掻き混ぜてやる。何も感じない掌でも、その髪の柔らかさはわかるような気がした。
穏やかな時間。一人の子供と居候の男の、他愛無い一時。それを唯一邪魔するのは、男の頭を襲う鈍い痛みと身体の怠さだった。
感覚を失ったはずの身体が不調だけを訴える様に、男は思わず舌打ちしたい衝動に駆られる。こんなのはフェアじゃない。
「……大丈夫？」
こめかみを押さえた男を気遣うようにトキが言う。併せ持った全ての慈悲を男に向けようとする、この子供の角はすっかりとれてしまったのだろうか。あの傍若無人っぷりは何処へ消えた、と男は思う。実は最初から、この子は優しかったのだけれど。
――男が体調を気遣われる場面が、ここ最近格段に増えていた。トキの横暴さが目立たなくなったと感じてしまう、それほどに。
（身体が重い）
気のせいではなかった。時間が経つにつれて確実に、彼の身体は重さを増してゆく。生前（と言うには多少抵抗があるが）に経験した貧血を、かなり悪化させたような。
大丈夫、と口先だけで答えれば子供はくしゃりと顔を歪める。嘘はあっけなくバレたらしい。
「魂、ってのは疲れたりするもんなのか」
「……わかんない」
暫しの沈黙の後返ったいらえは微かに揺れていた気がした。何か思

うところがあるのだろうが、トキはそれ以上何も言わない。男も、何も聞かない。
このいとけない子供に全てを尋ねるのは酷だと、彼はもう理解していた。トキは他の人間よりずっと、多くのものを背負っているから。
「――まぁそれは置いといて、だ」
トキ。
呼び掛けに子供はついと顔を上げる。鈍痛のする頭を一振りし、男は真直ぐにトキを見つめた。
「お前、家族は何処にいるんだ」
問い掛けた瞬間、子供はその目を際限まで見開いた。地雷だとわかっていてわざわざ踏んだ、男はもう慌てたりしない。
な、に、言ってんの。やっとの思いで言葉を返したトキに、彼は柔く笑いかける。
「女の子が一人暮らしってのァ、やっぱいけねーよ。いくらしっかりしてたって中学生だろう」
それに俺、実体が無いみたいだし。
おどけたように言い添えて男はトキを見る。親と一緒に暮らしたほうが、お前の為だよ（だって彼には護ってやれない。護るための、身体が無い）。
「僕は、平気だ」
「一人は淋しいって、言っただろう」
「ポチがいる」
「……それでもな、」
このままじゃお前は、一人になる――寸前まで出かかった言葉を男は無理矢理飲み下した。
「……俺とお前は、違う」
生きる世界も立場も、全て。
言えば子供はぐっと手を握り締め、そのまま無言で下を向いた。それで良い、と男は思う。
――トキの為に、何かしてやりたかった。強情で横暴で寂しがりの、

この子供に。
「なぁトキ、一人は、淋しいよ」
男は知っていた。他人の中に自分の居場所を見いだせない、その淋しさを。孤独の恐ろしさを。
「……ひとりは、さみしい」
記憶を失った。世界から隔絶されたことを知った。最後に別れを言いたかった相手がいたのか、それさえわからない。自分という存在を認めてくれた人間が、この世にどれだけいたのか。自分が生きていた証拠を伝えてくれる相手が、見つからない。
それは果てしなく深い絶望のように思えた。その淵に叩き落とされそうになった時、男は気付いたのだ。彼には、トキがいてくれること。
トキの為に、何かしてやりたかった。
「でも、僕、」
俯いたまま、トキは絞り出すように言葉を紡ぐ。
僕は、会えないんだ。言った瞬間肩が震えて、泣いているように見えた。
「会いたいけど、会えないんだ……」
「――俺が、何とかしてやる」
ぐらり、傾ぎそうになった身体に鞭打って男は立ち上がる。子供の頭をもう一度撫でた、彼は漠然とそれを感じていたのだ。

急がなくては、ならない。

12

触るなと声を荒げるのを無視して戸棚に手を掛けた。トキと男の暮らす家で唯一物をしまっておけそうな場所だ（食器棚やクローゼットは除いて）。
理由あって家族と別れて暮らすトキは、あろうことかその居場所を覚えていないのだという。正確には知らない、か。会いたくても会えないとはそういう意味。
お前も記憶喪失なのかよ、揶揄った男の頭をトキは思い切り殴り付けた。一緒にするな、と捨て台詞まで吐いてくれる。冗談が通じない。
「昔はお母さんも一緒にこの家に住んでたんだ。……しばらく、連絡が取れなかったことがあって。その間にお母さん、住む場所を変えちゃったから」
「あぁ？　ンだそりゃ。……親父は？」
「僕が小さい頃に離婚してる。顔も覚えてない」
なんつー親だ。男は唸って頭を掻いた。今まで深くは考えたことが無かったが、これではまるでトキは。
（捨てられたみたいじゃねーか）
口に出しそうになってぞっとする。
とにかく、その母親を見つけないことには話にならなかった。名前だけでは心許ない、どうにか顔写真でも見つけられないかと手当たり次第に棚の中身をひっぱり出して行く。彼の行動を止めようとしていたトキも諦めたのだろう、最終的には黙って成り行きを見守っていた。
トキの私物になら触れられる、一見無茶苦茶なこのルールをはじめて男は便利だと感じる。少なくともこの家の中の、大半の物は彼一人で扱うことができるのだから。
それでも時々、指を幻のように通過してゆく物があった。実体が無

いのは男の方なので、実際は指が物を素通りするのだが。それは指輪であったりやや洒落たハンカチであったり、おそらくはトキの母親の物なのだろう。
「……おい、これ開けていいか」
戸棚の奥から発見された、やや大きめのスチール缶を片手に男は問い掛ける。煎餅などが詰められていることの多いアレだ。
トキは暫しそれを凝視した後、ああ、と驚いたような声を洩らす。そんなところに、あったんだね。
「それ、僕の宝物なんだ」
「へぇ？」
駄目だと言われなかったのを許可と受け取り、蓋の隙間に指を掛けた。力を込めればぱこん、とやや間抜けな音と共に缶が開く。
中に詰まっていたのは色とりどりの、
「……千羽鶴？」
「そう」
僕が貰ったんだ。言いながら柔らかく微笑む、トキはひどく幸せそうだった。小さな子供が折った物のように、不器用に形づくられた折り鶴は形がひしゃげていたりする。内側の白が表に出ていたり、腹の部分が切れていたり。そんな鶴たちがおそらくはぴったり千羽、糸に通されていた。
「何お前、病気でもしたの」
折り鶴を千羽揃える、それの意図するところは一つだ。願掛け、それも病の回復を願う為の。
それに思い至って男は僅かに眉を寄せた。
「確かにお前って細いし色白いし……なんか病弱そうだなァ」
「入院、したんだ。だから学校に行けなくなった」
「……おいおいおい、」
トキの答えを聞いてさっと血の気が引く。次の瞬間それが頭まで逆流したのを感じた。
「お前の親は病気の子を一人にすんのか！？」

そんな子供を一人暮らしになんて？
ぶん殴ってやりたい、と思った。思って出来ないことに気が付く（しまった触れないんだった）。
ふつふつと沸き上がる怒りを顕にする男の腕に、小さな手が触れる。
「違うよ、」
「トキ？」
「違うんだ、僕が……僕が勝手に、お母さんの前から消えてしまったの」
何があったのか、問いただせるような空気ではなかった。俯いてしまった子供にそれ以上は何も言えなくて男は唇を噛む。
「……これは？」
話を逸らしてしまおうと持ち上げた、鶴束の下からは大量の写真が現れた。これもきっとトキの大切な物なのだろう。一番上に乗っていた写真に写る建物に、何だか見覚えがある気がする。
「それ、学校の写真だよ」
「中学？」
「うん」
やはり何処かで見たな、と男は思いながら次の写真に目をやった。学校の外観などどれも良く似ているのだから、気のせいかもしれない。
二枚目は花壇の、三枚目は広いグランドの写真だった。どれもその中学校の中の様子だろう。中学校をどこか外の、別の建物らしい場所から撮影した写真もある。緑に囲まれた、美しい学校だった。教室の中、黒板、薄明かりの廊下。ピアノがあるのはおそらく音楽室だ。無人の写真が何枚か続いた後、ふと賑やかな一枚が現れる。
「……お、」
思わず声に出したのは、そこに写るトキの笑顔を見たからだ。紺色の制服を着て、同じ年頃の子供に囲まれている。
「これ、ダチか」
「そーだよ。左からケイタ、みっちゃん、これが僕ね。で、こっち

がナツ……」
「こいつは？」
一番右に写る男子生徒の名を、何故なのかトキはなかなか言おうとしなかった。問いただせば渋々といった様子で口を開く。
「……ぷー太」
答えたそれは、明らかにあだ名。
ははーん。言ってニヤリと笑った男をトキは胡乱げに見つめる。
「何トキ。気になんの、そのガキのこと」
「……ちっ、がうよ！！」
「若いなァ」
「うっさい！　黙れ！　ポチのくせに！！」
言いながら写真をひったくる、珍しく狼狽えた子供を男はくつくつと笑った。良いねぇ青春。
そこまで考えてふと思う。トキは学校に、行きたいのだろうに。行けない理由はその病気なのだろうか。完治していないのならば病院にいるはずだ。母親は、何をしている？
……わからないことだらけだ。
「ほら次の写真解説しろよ」
「ポチの記憶なんて一生戻らなければ良い」
「すんませんでしたご主人様」
呪いの言葉を吐き出しはじめたトキにあっさり降伏して、男は次の写真を引っ張りだす。光沢のある面を、覗き込んで。

一人の女が、写っていた。
微笑みを浮かべる彼女の目元は目の前の子供に良く似ている。誰かなんて一目瞭然だ。男の目的はこれで一応達成されたことになるのだろうか。
「おかーさん……」
呟かれたトキの言葉に確信を得る。けれど男にはなぜか、写真の背景のほうが気になった。

その場所を、彼は。

13

知っている。
直観的にそう思った。トキの母親は灰色の壁と花壇をバックに立っていて、その壁には『く』の字型の亀裂が入っている。男はそれを、よく知っている気がした。
（何処だ？）
見ていたのだ、ほぼ毎日。乾燥に耐え切れず生まれたその亀裂に指を這わせ、なぞった記憶もある。
「トキ、これ何処だ？」
「お母さんがお仕事してた場所だよ。……どこにあるのかは、知らない」
撮影したのは母親の仕事仲間であったという。母の写真が欲しいとせがんだ子供の為に、忙しい合間を縫って一枚だけ。
「お母さんの仕事、見に行ったことないんだ。いつも働いてたから……邪魔になるし」
「母親の仕事って？」
「お母さん、薬剤師だったよ」
トキの答えに男は腕を組んだ。薬剤師ならばその仕事場は病院か調剤薬局、ドラッグストアぐらいだろう。そこに行けばあるいは、この子供の母親の行方は掴めるのではないか。
（何処だった？　思い出せ、俺）
全てを失ったわけじゃない。断片的に覚えているものもある。教科書であったりバイクであったり、自分の酒癖の悪さだとか。それは男の“記憶喪失”が世間一般のものとは違い、身体から魂が引き離されたことによって起こったものだからなのだろう。
ずきり、鈍い痛みに顔をしかめる。最近この頭痛は酷くなる一方で、時には起き上がるのさえ辛かった。一番症状が顕著になるのは今の

ように、何かを思い出そうとする瞬間である。
「ポチ、やめて」
考え続けろと念じた、心の声が子供に聞こえたらしかった。真剣な顔で制止をかけられるが、これぱかりは聞く耳をもてない。だって思い出せば、トキは母親に会える。
「何考えてんの馬鹿、頭痛いんでしょ」
「うるせー黙ってろ。俺ぜってぇ、この場所知ってっから……」
「良いよそんなの！」
必死の形相のトキを不思議に思って首を傾げれば、子供はキッとこちらを睨み付ける。余計なことはするな、という意味だろうか。そんなの知るかと男は無視を決め込む、その時だった。
「だって僕、見つけても、もう会えないんだ……！！」
細い声が男の鼓膜を揺さ振った。もう会えないんだ。頭に響く。もう、

『もう、会えないんだ』

あ、と思った。瞬間何かが洪水のように頭に流れ込んでくる。目まぐるしく回転して有りもしない脳を揺さ振る、一瞬でそれは何だかわからない。
それでも男は思い出した。もう会えないんだと、遠い昔彼に告げた人がいる。毎日通った学校からの帰り道、あの古ぼけた薬局の壁に指を這わせていた自分に。

風のもたらした幻聴だと思っていた。
それが“さよなら”なのだと、知らなかった。

「トキ！　わかったぞ！」
手を叩いて声を上げる。今男の脳裏には一つ、古びた建物が浮かんでいた。あれは確か薬局だ。何処にあったのかはわからないけれど、周りの景色は思い出せる。きっと、彼が昔暮らしていた家の近く。あそこに、辿り着ければ。
「行くぞ、トキ！」
今すぐ、に。
言い掛けた男の身体に異変が起こったのはその瞬間だった。がくん。突如膝から崩れ落ちて目を見開く。何とか横倒しになるのは堪えて、四肢の力が入らないのに愕然とした。視界が端から黒く侵食されてゆく。声が、出ない。
（何だ？）
「ポチ……ッ！」
遠くのほうであの子供の、切羽詰まった声が聞こえた。泣くなよ、と思う。思っただけだ。もう自分がどんな体勢かも、彼にはわからない。

「もう、時間がないんだ……」
男に駆け寄って膝を付く、トキの声は震えている。何とかそれが伝わってくるだけで、言葉の意味は理解できなかった。
「限界だね、ポチ……終わりにしよう」
何をだ。思ったところで男の意識は、完全に沈む。

14

夢を見ているのかと思った。
そうでないとわかるのは、視界に何も映らないからである。男の目の前は真っ暗で、その瞳は何の像も結んではいなかった。つまり、瞼が降りているのだ。
ねぇポチ。呼び掛けてくるあの子供の、声だけが聞こえる。
「僕、嘘を吐いてたんだ」
男の意識がはっきりしていないせいか、言葉の語尾がぼやけていた。トキの声は子守歌だ。眠い、と思う。
「ポチには帰る場所があるんだよ。今ならまだ、間に合う」
一定時間以上身体から魂が離れると、戻れなくなっちゃうんだ。本当に死んじゃうんだよ。
（意味わかんねぇよ、トキ）
思考脳力の低下した頭では、何も考えることができなかった。ただ子供の声が心地良い。羊水に漂う水母のように、彼の意識はぷかぷかと揺れていた。
「幽体離脱、ってやつだよポチ」
（何が？）
「ポチ、聞こえてる？」
（きーてるよ、）
ゆっくり瞼を持ち上げた。渾身の力を込めた男の視線の先、茶色い小さな頭が見える。やっぱりそこにいたのか、思っても声までは出なかった。
「ホントは、ずっと一緒にいれたらって思ったけど」
ねぇ、アンタは、生きる人。穏やかな声と共に男の頬を小さな掌が撫でた。冷たいのは彼だろうか、それともトキだろうか。
「お別れだね、ポチ」
すっかり力の抜け切ってしまった身体を奮い起こそうとして失敗し

た。切なげに歪められた表情に、手を伸ばすことも出来ない。

生きるんだよ、ポチ。僕は、それを――。

視界の端の方から靄のようなものが侵食してくる。酷く眠い。眠ってなるものかと捻り出した彼の声は、ほとんど擦れて聞こえなかった。目蓋が重い。全てが曖昧に揺らいでゆく。

名前を、呼びたい。

「さよなら、ポチ」

「……トキ」

「……さよなら、」

さよなら　、　ぷー太　。

＊　＊　＊　＊　＊

ひゅう、

ひゅう、
ひゅう。
風が強い。吹き荒れながら、冬の寒さを残したまま、それでも春の訪れを知らせる為にやってくる。
通い慣れた中学からの帰り道だった。
黒い指定鞄は半分口が開いていてかぱかぱと開閉を繰り返す。学ランの裾は擦り切れていたが、気にすることなどなかった。この年頃の子供など皆そうだ。

少年はいつも通りの家路の途中、ふと視線をやった先に目を奪われた。そこには年老いた男がオーナーを勤める薬局があるのだが、古い灰色の壁に亀裂が走っていたのである。
前々から小さな傷があるのは知っていた。それが何時の間に、こん

な大きな裂け目になったのだろう？
少年は興味津々で近づくと、それをそっと指でなぞってみた。存外に深い。もっと奥に指を入れて見ようとして、風が吹いたのはその時。

（　ぷー太　）

誰かに呼ばれたような気がした。風の音に交じって、微かに。
ひゅう、ひゅう。
春一番の吹き抜ける中、聞こえたそれは単なる耳鳴りだったのだろうか。

（　ぷー太　）

ひゅう、

（　ぷー太に、　）

ひゅう、

（　もう、会えないんだ　）

ごおぉぉぉ。
突風は木々の葉や塵と共にその音を巻き上げて消えた。後にはぽつり、少年が一人残される。

気のせいかな、と彼は思った。
首を傾げても、もう何も聞こえない。

（　君のことが、好きだった　）

15

彼が目を覚ました時、世界は酷く歪んでいた。ぐんにゃりと景色が融けている。
前にもこんなことがあったな、とぼんやり彼は思った。ゆっくりと瞬きすれば生理的な涙が零れ落ちる。でも何故だろう今度は、悲しくて、愛しい。
「……ふーた！？」
頭上から驚いたような声が降ってくる。視線を持ち上げた彼の視界一杯に真っ白な天井が映り込んで、次の瞬間ふっと陰った。不思議に思ってよく見れば、影の正体は悪友である。そのらしくない焦った表情に、彼の唇からつい笑いが漏れた。
「風太、おい、俺のことわかる？」
「啓太……なにおまえ。だっせェ顔」
「馬鹿野郎！」
べしり、勢いに任せて頭を叩かれて、起こしかけた彼の身体が布団に沈む。ああヤベしまった怪我人だった、おい大丈夫かと悪友は一人あたふたしていた。
この啓太と言う男は風太の幼なじみにあたる。家が近所で小学校から高校までを同じ場所で過ごし、大学に進学した頃からは専ら飲み友達としての付き合いだ。
名前も似ていれば背格好も、行動パターンまで同じ二人である。いつもつるんでは様々なことをやってきた、今も昔もその距離は変わっていない。
「お前自分がどういう状況かわかってる？」

「何やったの俺」
「事故ったんだよ、バイクで」
「……へぇ」
薬臭いのはそのせいか、と彼――風太は顔をしかめた。どうやらここは病院らしい。
「お前三日も目ェ覚まさねぇから、ほんとマジで俺……」
「……三日？」
たった、そんだけ？
うっかり呟いてしまった言葉に啓太が思い切り眉根を寄せた。何がそんだけ、だこの野郎！　耳元で怒鳴る相手に苦笑しながら、彼はじっとベッドの皺を見つめる。
たった、三日。風太は愕然とした。死にかけたことに間違いはなさそうだが、もっと長いと思っていたのだ、あの時間は。
啓太は彼の反応がお気に召さなかったらしく、泣きそうに歪めていた目尻をキッと引き上げた。ああマジで怒らせたな、上の空で風太は思う。
「ごめん」
「ふざけんなよお前、どれだけ俺が心配したと……」
「だからごめんって……なぁ、啓太」
悪友の言葉を遮って彼は目を閉じる。目蓋の裏に浮かんだ小さな影を思い描いて、慎重に言葉を選んだ。ここはもうあの小綺麗な部屋ではないのだ。２ＬＤＫ風呂付き、アパートの三階。
何だよ、と啓太が続きを促すのが聞こえる。
「中学ン時にさ、初めて同じクラスになったヤツがいたの。トキ、って覚えてるか」
「トキ……？」
問われて、啓太の視線が僅かに揺らぐ。暫らく宙を彷徨っていたそれがふいに止まると、思い当たる節が有ったのだろう、ああ、と啓太は声を洩らした。
「トキ、時任か。時任美晴」

いたいた。言いながらより鮮明な思い出を手繰り寄せたのだろう、啓太はその名前に関する記憶を並べはじめた。
綺麗な顔立ちをしていたこと、なのに意外と毒舌であったこと、色白であまり外で遊ばなかったこと。当時女子の間で一人称を“僕”にするのが流行っていたこと、それから、
「中二の終わりに……病気で死んじまった」
「……ん。そいつの夢、みてた」
「――――え？」
啓太は驚いたように目を丸くする。無理もないだろう、死の淵を彷徨った人間の口からそんな言葉が出れば。
「仲良かったよな、俺たちと」
「あ、あぁ。俺と風太の他に、満子とか夏美とか」
「猫が苦手で」
「そういや、見る度に隠れてたなぁ」
「あいつが入院する前に、写真撮った」
「よく覚えてんなー。千羽鶴も折ったぜ」
風太は目を閉じて、あの小さな少女を瞼に描く。柔らかい髪や白い肌や、生意気そうな瞳。捻くれた言葉しか出てこない唇までありありと思い浮べることができた。
だって、いたのだ。ついさっきまで、彼の目の前にはトキが。一緒に、いたのだ。
「……なんでかあいつ、俺のこと“ぷー太”って呼んでたよな。プータローみたいだからやめろっつったのに」
「恥ずかしかったんだろ。……トキってさ、絶対風太のことが好きだった」
「え」
お前知ってたの？　問い掛ければ啓太は肩を竦めて笑う。俺だけじゃないさ、皆気付いてた。お前以外な。
「お前鈍いよな。時任が死んじゃって、風太には教え辛かったんだよ。悲しさが増しそうじゃん」

「そっか……俺は、さっき気が付いた」
「夢で？」
「そう、夢で」
変なの、と啓太が笑う。夢だということにするしかなかった。きっと、誰も信じない。
「俺さ、トキが死んだ日に」
「うん？」
「あいつの声、聞いたんだよなぁ」
「……そうか」
お前にお別れを、言いたかったんじゃねぇの。啓太の言葉にそうかもしれない、と頷いた。彼はずっとそれに、気が付いてやれなかったのだけれど。
「悪ィ、眠くなってきた」
そう告げれば啓太は無言で、どこか遠慮がちに席を立った。医者呼んどくから精々検査されろよ、と憎まれ口も落としてゆく。
また明日来るわ、おうサンキューな、そんな会話を最後に悪友は病室を去っていった。

静寂が訪れる。天上に向かって手を伸ばしてみる。
嘘みたいだった。彼はまだ、この世界で生きている。
一人残された空間で風太は枕に顔を押しつけると、くぐもった言葉を紡いだ。誰にも聞こえない、もう聞く相手の無い言葉を。

「おい、全部思い出したぜ――トキ」

あの子供は、もういない。

さよならを知らなかった

【ある子供の話】

幼い頃から身体は弱かった。力を持ちすぎた魂に、器がついていかなかったのだ。

“おかしなモノ”が見えても、学校に行くのは楽しかった。体育はろくに参加できなかったけれど、大好きな友達と、ほんの少しの“特別”がそこには在ったから。

中学二年の冬だ。

何の変哲もない風邪を拗らせた。入院することになった日も、まさか自分が死ぬことになるなんて考えもしなかった。

けれど身体は限界だったらしい。ウイルスの攻撃に耐えきれなかった器はあっさりと職務を放棄して、魂だけが投げ出された。

その子供は死んだのだ。

春はすぐそこだった。誕生日までは、あと数日。子供の時間は十三のまま止まり、永遠となって。
余りにも早い終わりだった。覚悟などなかったから、誰にもさよならさえ告げていないのに。

母親は唯一血を分けた我が子を喪って、二人で暮らしていた家を引き払い実家へと戻っていった。
その子供が肉体を離れて帰ってきた時、そこにあったのはただの空き家だ。

自分がおかれた状況は理解していた。それでも、何処にも行けなかった。

――どこに、いけばいいの？

子供がおかしな魂を捕まえたのは、それから八年も経ってからのことである。
身体から抜け出てしまったことにも気付かない間抜けな男の、正体を子供は知っていた。
“特別”の彼は一人の男になっていた。
時を止めたままの自分とは、違って。

共同生活は時間稼ぎだ。
生前から子供は“そういうモノ”に触れることが出来ていたが、霊体同士ならばもっと楽になる。魂の力はまだ枯渇していなかったので、男に分け与えてやることもできた。
そうして一緒に暮らして、彼をこちらに引き込んでしまうのだ。

一緒に死んでほしかった。

独りきりだったこの長い年月は、彼を待つためにあったと思えたから。

（ひとりは、さみしい）

でも彼が、一緒に逝ってくれるなら。

けれど結末は違った。
身体から魂が離脱し、日に日に生気を失っていく彼を見るのに耐え切れなくなったのもある。
でも何よりも子供は、満足してしまったのだ。
男と一緒に過ごせた、僅かな時間が幸せだった。
永遠に感じた八年間が満たされて、それ以上のものが溢れてくる。

はじめて、願った。

生きていてほしいと思えた大切な人。彼は世界に帰り、その眩しさと暖かさを実感するのだ。
生きて、生き続けて、様々なものに触れて、笑って泣いて、そうした時間の中でほんの少しでも構わない。
自分のことを、覚えていてくれたなら。

「……そうだったら、良いな」

子供はそっと目を閉じた。
たった今目の前から消えて、在るべき場所へと帰っていった男の事を考える。
暖かい記憶に満たされて、何だか自分まで眠たくなってしまった。

「もう、良いかな……」

ねぇ、ほら。

今度は、さよならを言えるから。

本当は生きているうちに、伝えたい言葉があったけれど。

寂しいけど、悲しくないよ。

「さよなら、ポチ」

さよならを知らなかった（終）

さよならを知らなかった（後書き）

トキの正体に序盤から気が付いた方、いらっしゃるのでしょうか（ドキドキ）。最後までお付き合いありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8608c/

さよならを知らなかった

2010年10月15日21時42分発行